



Title	在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究：大阪市生野周辺をフィールドとして
Author(s)	金, 美善
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42207
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	金 美 善
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 15909 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究 -大阪市生野周辺をフィールドとして-
論文審査委員	(主査) 教授 真田 信治 (副査) 教授 土岐 哲 助教授 渋谷 勝己

論文内容の要旨

本論文は、在日コリアンを対象に社会言語学的な観点からその言語生活の実態を捉えたものである。大阪市生野周辺で長年積み重ねたフィールドワークによって明らかにした実態を、以下のような1～9章の構成において記述した。

第1章では、在日コリアンの置かれている社会的環境を把握するために、彼らの来日と定着の過程、そして現在の母国語維持の様相をまとめている。

第2章では、先行研究で明らかになったことを踏まえつつ、本論文の枠組みと方法論を提示している。

第3章と第4章では、申請者のフィールドワークの方法とデータの内容を紹介している。特に、コミュニケーションの手段として使用される文字の表記が、コミュニティの構成員によって変形されていく過程を、在日コリアン密集地域としての生野という地域的特性を背景にデータを提示、考察した。

第5章では、在日一世の使用する日本語の構造的側面に着目し分析を試みている。一世話者の運用する日本語には彼らの母語の影響が強く関わっていることを証明した。また、自然習得の初期の段階での干渉の形態が長年の使用によって化石化されていることを具体的に明らかにした。

第6章では、一世話者の属する社会的環境と変異音の使用の相関について考察している。他地域に居住し、違った社会的属性を有する一世との比較から、生野周辺の地域的特性を浮き彫りにした。

第7章と第8章では、一世話者の両言語の混用状況について分析している。話者の言語コードを韓国語コード、日本語コード、混用コードの3つに分け、それぞれが異なる領域で使用されていることを指摘した。また、混用形式を、両言語の形態素で混用された複合動詞（「日本語+hada」「韓国語+する」）に注目して、その具体的な内容、形態的制約について詳しく検討した。

第9章では、二世以降の世代の母国語使用能力と文化維持の状況、一世の言語的影響について、アンケート調査の結果から考察している。生野周辺に居住する二世以降の世代の母国語使用能力は、二世において、「聞く・話す」能力が「読む・書く」能力より優先し、三世においては「読む・書く」能力が「聞く・話す」能力よりも優先していることを明らかにした。そして、この結果については、二世の場合、親世代である一世とのかかわりが反映し、三世の場合は母国語の学習経験が影響したものであると解釈した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本における最大のマイノリティ集団としての在日コリアンを対象に、その言語の運用を言語接触の観点から分析したもので、日本の社会言語学研究に新たな領域を提示するものである。

在日コリアンは、その多くが日本の植民地支配をきっかけに来日した人々とその子孫で構成されている。彼らの来日から定着までに置かれた社会的環境は、その言語生活に深くかかわり、コミュニティ内部での言語取替え現象をきたした。世代交代とともにモノリンガル化が進み、彼らにとって母国語はコミュニケーションの手段からアイデンティティの表明のための手段となりつつある。そして、そのような現象は彼らの母国語教育の形態にも大きな変化をもたらしている。それらの状況が本研究では如実に捉えられている。

特に、在日コリアンの密集地域である大阪市生野周辺における韓国語と日本語の文字間に生起する接触の様相を詳細に捉えた点は、言語接触研究での新しい素材の可能性を示唆する貴重なものである。

生野周辺の在日一世には済州島出身者が多いのだが、その話者が運用する日本語の文末には済州島方言の文末詞が現れることを明らかにした。また、日本語の統語構造に部分的に韓国語の形態素が埋め込まれた文形式、韓国語の統語構造に部分的に日本語の形態素が埋め込まれた文形式の具体例など、両言語の混用にかかる詳しいデータの報告がある。これらの点については高く評価できる。ただし、本論文では現象の把握が先行して項目別の体系的記述がやや欠けている点が指摘される。

しかし、この最後の点は、本論文の価値を損なうものではなく、研究の継続によって補えるはずのものである。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。